

---

# 陰惨のインセイン

じじじ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

陰惨のインゼイン

### 【Nコード】

N4122S

### 【作者名】

じじじ

### 【あらすじ】

ホラー。綴りは *Insane* ですな。

私はどうしてもこのことを書かねばならない。今やインターネット上に散在する無数の創作群、それら全てのものに対して前提的に考えられる創作性や遊戯性などというものは、それを証明する一切の根拠を持ち合わせていないということ。健全な人間が何者かによって精神に異常を来すほど追い詰められ、真に迫った文章を書いたとしても、創作の内にあるのであればすべからず虚偽と認められ、審議の場を設けられることすらない。しかし少なくとも私は、敬愛する友人　　今となつては彼女の真の意思は、思量することしか出来ないが　　が遺したあらゆる創作は、奴の存在を世界に主張するという主題が一貫していると考えている。そしてその主題こそが奴の狙いだと考えられ、表向きはそうであるが、作家が自らの創作物に込める裏の真意というものは、読者に助けを求めるシグナルが込められているに違いない。そして私もこの文章を通して、非現実的な物語の幾つかが真实性を有することを訴え、その幾つかの中に彼女やその他の？インセイン？の作家の著作が含まれていることを、今これを目にしている貴方に気付いてもらいたい。気付き信じたとしてその時にはもう私は手遅れかもしれないが、この物語を頭の片隅に留めることで、深淵を覗かせるインセインが貴方の背後に忍び寄っていたとしても、その身を守れるのかもしれない。

これを読んでいる貴方にとっては既知の事実だろうが改めて確認しておきたい。インセインとは昨今ネット上で流行している小説だ。登場人物自らの体験談として書かれる怪奇小説だが、一般的な小説本とは趣が異なる。インセインの最大の特徴は、誰もがインセインの物語を書き加えることが出来るという点だ。そも誰が発端となつたか知れないこの？怪奇小説遊び？は、現在では多くのフォロワーを生み出し、題目数だけでも全て把握し切れないほど膨大だ。加えて小説以外に詩や絵でも表現されることがあるという、マルチメデ

イアの中に遍く存在するものとなっている。

また、インセイインとはその物語に共通して登場する人物の名である。いや、人がどうか、得体の知れないものと言った方が正しい。世界因果の鋭角に住まうという奴の特徴は、中庸である。その意味するところは、インセイインはあらゆる様相を持ち合わせて、その中間の性質を外に表しているのだとされている。人の姿をしているが、人間かどうかはわからない、何か正体の掴めない奇術を用いて、人間を恐怖に陥れる。容姿は小柄で、大人とも子供ともつかない。声や顔など、性別を判断できる要素の悉くが、しかし中性的で男とも女ともつかない。と言っても、全身を赤紫のフード付きマントで覆っているのでその仔細も知れない。赤紫という色彩は、可視光の波長を全て辿っていても現れることのない色だという。可視光の波長帯域幅の両端にある赤と青の光を組み合わせることでしか見られないのだ。これも中庸の色彩なのだ。インセイインの先駆者が考察していたが、詳しくはそちらを参考にさせていただきたい。インセイインとは不偏不倚の存在なのだという。インセイインの行動原理は我々では窺い知ることは出来ない。その真意はわからないが、一説には自らの存在を受け入れられる者とは親しくあろうとすると言われている。創作を行う想像力豊かな作家や絵描き、穢れを知らぬ無邪気な子供などを好むという。もちろんその全ては幾人もの手によって創作される中で面白半分に付け加えられたものであるのか、それともインセイインの真の姿を如実に表現しているのかについては、私の矮小な見地では知ることの出来ないことだ。私はインセイインについて異常な興味があり、その果て無き創作の深淵を覗き見ようとしていたことがあったが、今や複雑怪奇となった創作されるインセイインの存在が、一体どこから始まっているのか、それを知る人間に出会ったことは一度もないことは確かである。そしてこれを読んでいる貴方は先まで書いたインセイインの深淵を知ろうとしない方がいいだろう。私は貴方の興味を強く押し留めるためにこれを書いているのだということをやめゆめ忘れないでほしい。何故インセイインを

知ってはいけないのかについては、この言葉を使って説明させてもらおう。深淵を覗き込むものは自分もまた深淵に覗き込まれていることを忘れてはならない、と。私や私の友人について言えば、その悪い例に違いない。インセインに手を付けている多くの作家の中には同じ憂き目に遭った者達が何人もいるのだらうと、今の私は思いを馳せることが出来る。

片桐翼と私の共通点は同じ高校で同じ学年、同じ文芸部に所属していたということぐらいだろう。それだけで充分な風に聞こえるが、同じ部活動に所属していたと言ってもあまり関わり合いはなく、お互い顔と名前は覚えていたという程度だ。文芸部員が総勢二十人もなれば浅い関係の者がいても不思議ではない。私が翼に持っていた最初の印象は、内気で控えめ、暗い雰囲気を持つ文学少女だった。私　茂木梓という人間は、少なくとも彼女よりは快活な人物だったと思う。私が活発というわけではなく、翼があまりにも消極的で己を出さない性格だったのだ。そんな片桐翼と私が深く関わりあう原因はインセインにある。

その頃の私はインセインに傾倒していた。インターネットで見られるインセインの小説は有名どころはもちろん、無名で評価の低いものにすら目を通していたほどだった。しかしその中でも強く印象に残っていたのが？片翼墮天使？というペンネームを名乗っている作家の作だった。インセインの小説の中でも勸善懲悪といったわかりやすいストーリー性などなく、独特の不可解な雰囲気纏っている作風が読んだ者に衝撃を与える。ペンネームの胡散臭さや時には吐き気を催すほどの趣味の悪さから忌避されることも多いが、インセインを古くから知る者には非常に好まれていたと感じる。これこそインセインなのだと言われることもあった。私も一度目にした後には熱に浮かされたように片翼墮天使の作品に読み耽り、インセインの不可思議な存在について思いを巡らせたものだ。

その片翼墮天使の正体が片桐翼なのだと私が考えるようになったのは、文芸部の活動中に彼女の偶然にも創作ノートを目にし、そこ

に並べられている悍ましい単語の数々にかの作品の匂いを微かに感じ取ったからだ。何より彼女の名、片桐翼とペンネーム、片翼墮天使の二つには偶然以上の相違点があったのだから、それを思い浮かべるのは無理のない話だろう。

私はそれとなく彼女に話し掛けた。最初は興味のない風に振舞っていたが、私がインセインの熱狂的な信奉者であることをほのめかすと、彼女も私に興味を持ってくれたみたいだった。私が片翼墮天使の名前を出した時、彼女は酷く驚いた様子で、けれども鎌をかけたても、私の推測を肯定するような言葉は一言も口にしなかった。否定もされなかったことで私はますます彼女に疑いを持つようになった。

当時私が驚かされたのは、片桐翼が寡黙なのは部活動の間、もっと詳しく言えば創作活動に勤しんでいる間だけだったということだ。それ以外の彼女は他の生徒よりも朗らかといえるほどに明るく陽気で、友好関係も広がった。今としてみればその理由　悍ましい恐怖の一角を見せていた原因も私にはわかるのだが、その時は片桐翼はそういう人物なのだと言葉に解釈していた。明るい片桐翼はインセインのことについては一言も口にするのではなく、私が話題を振ったとしても上手く逸らした。話を回避する翼の表情が、まるで笑い、それも嘲笑を、必死に堪えているような、とても卑しく感じるような表情を浮かべていたので、私はそれで降明るい翼にインセインの話をしたりすることはなく、また根暗な時の彼女にも深く突っ込んだ質問をすることは控えるようになった。それでもいつかインセインの話題を聞き出せるのではないかと、部活動以外でも接点を持つようになった私と彼女が普段どのような会話をしていたかと言えば、それは酷くありふれた日常的なものが大抵だった。二人とも幼い妹を持っているとわかったときには、その話題だけで盛り上がったし、授業や校則の厳しさについての話題もした。翼の手首に刻まれた躊躇い傷を見つけたときは、私は息を呑んだが、けれどもその原因に深く関わろうとすることはしなかった。気が引けたという

のもあるが、お互いに気遣っているという美点もあったのだ。傍からならごくごく一般的な仲のいい二人の女子生徒に見えただろうが、私を感じたところには、深く付き合おうとすればするほど彼女の中には一貫した芯を見つけ出すことはできず、何か薄気味悪ささえも一部にはあったことが思い出せる。一方で部活動の時に見せる彼女の表情は何かおどろおどろしいものに恐れる気配を見せながらも、先の薄気味悪さよりは鳴りを潜め、インセインの怪奇さに怯えた風な彼女には普段よりも遙かに人間的だったと感じる。私も部活動のときには翼の様子に心乱されるようなことはなかったと真の彼女の名誉のためにも書いておこう。その外的には問題のないように見える奇怪な交友関係は一月ほど続いた。

ある日のことだ。昼休みの時間に私と翼が　つまり明るい翼と共にいたというわけなのだが　共に話をしてしていると、佐藤健という同学年の粗暴な男子学生が野次馬か取り巻きかを二人連れてこちらに突っかかってきた。曰く彼自身はネット上で一つの流行にもなっているインセインが気に入らない者らしい。そしてそれを崇拜している者も気に入らないのだと。私たちがそれに当たると知った彼は、私たちの前に立ちはだかり、インセインなど馬鹿馬鹿しいと、子供騙しなのだと早口気味に言った。その時は私も口には出さなかったが憤慨した。今となっても彼の態度は鼻持ちならないが、一方で彼が辿った運命について思うと、知らぬことこそ深淵の恐怖に対して最も健全な行いなのだと感心することがある。とにかく私はこういう輩は相手にすべきではないと沈黙を保っていたのだが、隣にいた人物、私がインセインの作家の一人である片翼墮天使だと睨んでいた者、片桐翼はそうではなかった。佐藤の雑言に対し、最初は何も言わなかった彼女は、しかし急に堰を切ったかのように声を上げたのだ。それは怒声にも聞こえたが、その時見せた翼の恐怖に怯えきった表情は、その言葉は悲鳴なのだと感じただろう。「インセインは実在する！」その言葉は私が今までに読んだインセインの小説の多くよりも迫真で、片翼墮天使の作品の中に在する、得体の知

れない恐怖を表現するものに、非常に近いものを私は感じた。そして同時にその口調には意外なことに根暗な片桐翼の印象と言うものが色濃く出ていたというのが私の所感である。

翼の声で、その場での佐藤健との遣り取りは一応中断されたのだが、その夜に不思議な動きがあった。現場にいた私でも予兆を捉えることはできず、そしてそれは佐藤に関しても同様の状況だったのではないだろうかと今では考えることさえある。とにかくその晩、私の携帯電話にメールが届いた。それは酷く簡潔な文章は片桐翼からで、どうやら彼女は夜の学校に佐藤を呼び出したらしい。翼が何を思ったのか知れないが、並々ならぬ恐怖の予感を感じた私は取るものも取り敢えず学校へ急いだ。そこで私が見た光景は 世間では決して信じられるようなことがなくとも 揺るぎない事実である。後からやって来た警察や、学校のホールでただ気絶していただけの佐藤の連合いは私の主張を頑なに受け入れようとせず他の場所に真実を求めているが、一方でそれに相応しいものを見つけられずにひたすらに道に迷っているのが現状だ。

とにかくその夜私が見たものに関して、私は嘘偽りなく書くことと思う。私が守衛に適当な言い訳をして学校の中に入ると、校舎のホールで倒れている佐藤と彼の応援らしい男の姿を数人認めることができた。皆その場に倒れていて動いているようには見えなかった。これは誰がやったのか知れない。が、その倒れている人の中には片桐翼の姿がないことに気付くと私は背筋が寒くなった。さて彼女はどこにいるのだろうかと校舎の奥に進んだ。互いの教室にはおらず、ならばと次に足を運んだのが文芸部の部室だ。確かにそこに彼女はいた。こちらを待っていたかのように立つ彼女を見て、私は瞠目した。彼女は何を考えているのか知れないが、彼女の姿の意味するところが私にはわからず混乱したものだ。片桐翼はフード付きの赤紫のコートを身に纏っていた。それはまさしくインセインの衣装だったのだ！

それを見た私は最初、彼女がインセインになりきり、インセイン

の雑言を吐く佐藤健に私的な誅罰を下したのだと考えた。ホールに倒れていた男達は翼がやったのか、私は問うたが、彼女は根暗の様子で、酷く狼狽しており、脈絡のない言葉をうわごとのように呟いただけだった。「私は悪くない」「インセインが私に取り憑いてやったのだ」「貴方も逃げた方がいい」「一見すれば何か窮まったような言葉の数々。私は確信して罪を攻めると、彼女は失望の表情を浮かべ、扉の近くにいた私を押し退けて部室を出て行った。私も急いで追い掛けたが、小さい彼女の身体は随分と早くすぐに姿が見えなくなつた。どこに行ったものか、迷っていると、突然彼女の悲鳴が聞こえた。そこに行ってみれば、インセインのコートに身を包んだ片桐翼が廊下に倒れていて、彼女の傍には、先までホールで倒れていたはずの佐藤健がその手に金属バットを握り締めていた。彼は逆上していることが傍目に見ても明らかだった。手の中の得物を倒れている翼の身体目掛けて何度も振り下ろしていた。叫び声付きの動きは、気の遠くなるほど何回も続けられ、片桐翼の身体は処々でひしゃげ頭蓋が陥没し、辺りの床には光の関係か真っ黒に見える液体が流れ出していた。私は目前で行われる恐怖の光景に足がすくみ、ただ眺めていることしかできなかった。佐藤はそれを終えると、当然のように今度は私に向かつてきた。一学生に過ぎない彼がどうこうできる話ではないと思うが、口封じでもするつもりだったのだろう。私は逃げたが、男女の身体能力の差は歴然で、私はすぐに追いつかれた。咄嗟に近くの教室に逃げ込んだものの、すぐに追い詰められてしまったのだ。私はその場に座り込み嘆願したが、怒りの錯乱の中にあつた彼は聞いてはいなかっただろう。そして彼のバットが私の頭上に振り下ろされた。ああ、ここからが世間の誰も信じない話なのだが、しかし現実が起こつたことだ！ 佐藤のバットが眼前まで近づいてきたとき 夜の色が濃い赤紫色に変わったのだ！ そして次の瞬間、私の身体が赤紫色のコートに包まれた。革かエナメルかとにかく得体の知れない生地でできたそれは、私の背から柔らかく跳ねるように動いたというのに、私の前面では非常に

硬化していて、振り下ろされた金属バットを防いだ。

その時私の頭に声が響いた。それは男とも女とも付かない中性的なものだ。そして片桐翼の声にも非常に似たような性質があることに気付いた。許さないよ、と声は言う。私の意識は確かだ、それをしっかりと聞いていたが、しかし意図していないというのに私の身体は動いた。何者か　　恐らくはその声の主　　に突き動かされていた。前に伸びた左手は佐藤のバットを掴んで捻り、固定したところで右拳が彼の顔面に飛んだ。彼は虚を突かれたというのもあったが、私の身体の動きはまるで外部から動かされているかのように悍ましく機敏で底の見えない力が備わっており、彼は抵抗することもできず痛めつけられた。私は驚き、同時に感動していた。人智を超えた存在　　インセイ私が私の身体を操っているという事実は、窮地だということにも拘らず私を酷く興奮させた。そして頭に響くインセイの声は、紛れもなく片桐翼のものだろう。インセイの作家が片桐翼だと私は考えていたがそれは違ったのだ。インセイの正体こそが片桐翼だったのだ。インセイの実態を知れたことで私はまた気分が途轍もなく昂揚していたという事実は書き記しておこう。私の身体はしばらく攻勢を続けた後、満足して踵を返す。彼はとも見れたものじゃないグロッキーな状態になっていたが、まだ息があった。「これで終わりだ」頭に響く翼の声に合わせて、私の身体は口を開いた。そして指を一度鳴らす。それがインセイが物語に決着を付ける合図だということを私は知っていた。その後、教室の後ろに並ぶロッカーからけたたましい音が鳴り響いた。弾かれたようにロッカーの扉が開くと、そこからは　　無数の人間の腕が伸びた。人間の腕と言っても形だけで、大きさは何倍も大きかったり、ずっと小さいものもあった。長さは皆一様に長く、しかし本来の通りに肘の部分が曲がるだけの関節構造なので、ロッカーの小さい口を押し退けるかのように這い出していて、それがまた悍ましかった。無数の腕は倒れていた佐藤の身体を捕らえ、彼の悲鳴も無視して無慈悲にもロッカーの中に取り込んでいった。そしてロッカーの扉は

閉まり、後には何も残らなかった。赤紫色の異質な空間も、その後すぐに本来の夜の色を取り戻していた。

その間も終始私は瞠目していた。目の前でインセインの活劇が見られた。しかもそれを演じたのが自分自身ともあれば、インセインの信奉者で興奮を覚えないものはいないだろう。そして友人の片桐翼こそがインセインの正体で、その不可思議な力で私の身を救ってくれたのだ！ 私は歓喜に打ち震えた。有頂天にあつて狂喜していたと正直に書こう。しかしそれはすぐ裏切られることになる。私はその後、先に倒れていたのと同じ場所に、先と同じ陰惨な格好で倒れている翼の姿を見つけたのだ。唯一違ふ点はインセインのコートがなくなっていて、彼女の普段の私服が外に現れていたというだけだ。彼女の姿を見つけた私はまるでどん底に突き落とされたような気分だった。片桐翼はここに倒れている。では自分を救った声の主は一体何者なのか。その正体不明の存在が顕現したかのようなインセインのコートが、未だ私の身を包んでいるのはどういう理由なのか。混乱の只中にあつた私に、頭の声が語りかけてきた。その言葉の内容は今でもはつきり覚えている。

・翼はいつだって君に助けを求めていたよ。最後の最後まで佐藤に殴られ、頭蓋が砕かれ絶命するその直前までね。けれども最後まで気付かれることはなかった。

・仕方がなかったと言うかもしれないけれど、可哀想なことをするよね君は。

・ああ、それでもボクは構わなかったんだけれどね。新しい生贄が見つかったんだから、これで満足さ。

その声を作った言葉の数々は私を戦慄させるには充分過ぎるものだった。私は半ば錯乱しながらも赤紫のコートを脱ごうとしたが、私の身体にびつたりと張り付いていてそれは叶わなかった。そしてとかく身体が重く感じた。全身が気だるく感じ、妙に動きづらい。

私は重い身体を引き摺りながら、何とか近くの女子トイレに入る。灯りを付け、その洗面台の鏡で自分の姿を確かめた私は、そこで失神してしまった。どれだけ健全で屈強な精神を持つものであっても、私の立場にあつては、精神を正常に保つことが難しい状況だっただろう。そこにいたのは悍ましい姿だ。狂気の地獄の穴蔵に飛び込まされたような者の末路。吐き気を催す邪悪。呪わしい異様の姿がただの悪夢だったのだと私は切に願うばかりだ。文章に書き起すのも恐ろしいが、意を決する。鏡の中にいたのはフードを目深に被ったコート姿だった。だがその二つの袖からは私の腕の他に、まるで先のロツカーから伸びる腕を再現されたかのように、無数の腕が伸びていた。その腕の中には、想像するだけで悍ましいことだが、手首に深い傷が残っている物もあった。コートの背中は不自然に膨らんでおり、裾からは四本の足が生えていた。さらにはフードから覗く顔は、紛れもなく私のものだったが、ああ神よ！

私の顔を呑み込むように、フードの縁の下、私の額部には誰か人間の顎と歯の並びが見えていた。前歯は小さく犬歯のない落ち着いた並びを表すのは、それが下顎だということだ。そして上顎は、私の口元まで噛み付いていた。その下には鼻があり、そしてさらにその下、コートを合わせている首元の開きから、何者かの双眸が、鏡越しに私を睨んでいたのだ！

それからのことは詳しく覚えていない。それは一時のことではなく、何ヶ月も経過した今も同じである。意識が薄弱で記憶が不連続だ。誰かが私を操って営んでいる日常を擦りガラス眺めているようだ。けれども一日の中で意識の明瞭さが蘇る時間がある。それが今こうしているような、小説を書いている時間だ。気が付けば机に向かつていて、そこから動こうとすると、勝手に身体が動かされて元に戻されてしまう。最初のうちはこの異常を訴えようとする文章を起こしたが、それは次の執筆の時間には消されていた。何度か繰り返すうちに、インセインの小説だけは書いても消されずに残っているということがわかった。だからこうして私はインセインの小説を

書く振りをして、世間にインセインという恐怖を知らしめようとしているのだ。

しかし私はもう気付いている。今の私の状態こそが、以前に片桐翼が置かれていた状況と同じなのだ。片桐翼もインセインの小説を書かされていたのだ。文芸部の部室で。その時だけ彼女は本来の自分を取り戻していて、それ以外の彼女は別人が演じていたのだ。そして今の私もそうなのだろう。さらに言えば、私や翼の前の

インセインの小説を書いていた者達の何人かも、同じような目に遭っている者がいてもおかしくない。それが全体の何割か、それとも全てかは知れないが。だから貴方にも気付いて欲しい。このインセインの小説に触れることで、現実の恐怖に目を付けられ、この執筆の檻に放り込まれる可能性があることに。日常生活をインセインに乗っ取られてしまうことに。

意識が許す範囲で調べたところでは、片桐翼は撲殺。あらゆる証拠から推察される殺人犯の佐藤健は、何故か学校の教室のロッカーに挟まれて息絶えていたという。インセインに関わった人間は碌な人生を辿っていないことを覚えておいて欲しい。

ただ書かされるだけの日常を繰り返しながらふと思うことがある。そいつとは限りなく近くにいるというのに、その正体は全く掴めない。その目的を推量することはできても、真に知ることはできない。だからこそ奴はその名で呼ばれているのだろう。インセイン　　気狂い、と。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4122s/>

---

陰惨のインセイン

2011年4月11日22時25分発行